タイ北西部のすず・タングステン鉱床瞥見

小　村　幸二郎（鉱　床　部）
Kohjiroh KOMURA

バンコックの早朝　メナム（チャオ・プラヤ）川のオレンジ色の流れに逆らって　何処までゆくのか満員の客を乗せた舟がエンジンのにぶい響を残して北へ向った．川岸ではとっくに水上マーケットが店開きしている．対岸のワット・アルン（暁の寺）は薄墨色に見えはするが極彩色の小さな陶器をはめこんだ高さ 74 m の塔は　朝陽を浴びて宝石をちりばめたように輝やいているのだろう．　ホテルSからメナム川へ向う折には静かだった道路は　ワット・プラ・ケオ（エメラルド寺）やワット・ポー（涅槃寺）の壮厳な建物が明るい陽射しに華麗に変身しはじめた帰りには　自動車の騒音に包まれていた．

「タイ族の国」を意味する Prathet Thai または Muang Thai を国名とするタイ王国は　古くはシャム（Siam）の名で知られていたが　シャムという名は一体何に因んで付けられたのだろうか．　サンスクリット語のサヤーム（黄金）がその語源であるとか　シャン族に因んで名付けられたとか　あるいはメナム川流域一帯を意味するシャーマが語源になっているとか様々の解釈がなされているようだが　その名の真実の由来はまだはっきりしていないらしい．　タイという名はタイ族を意味するとともに自由をも意味するらしいが　この自由という意味には中々奥深いものが秘められているように思われる．

タイ族の歴史を逆に辿ると　その故郷は中国の長江（揚子江）流域から華南にわたる地域ということになる．一般に牛を水田で使役する光景は中国ではあまり見かけないが　タイでは至る所で見かけることから想像すると恐らくタイ族は牛を頼りに水田を開発しながら低地帯に沿って次第に南下し　現在のタイに辿り着いたのであろう．　バンコック付近の整然と区画された水田をはじめて見た時には　メナム川に沿って南北方向にひらける低地帯にはこのような水田が延々と続いているのだろうと想像したが　この想像は当ってはいなかった．

以前は空港から都心部へ向う道路沿いには　広々とした水田を控えた農家が点在する風景があり　小さな水溜りには水牛がほてる身体を休めていたものだが　今は殆んどとぎれないほど家が建並んでいる．　世界に共通してみられる近代化の波がこのように変貌する原因かどうかは分らないが　とにかくその変貌ぶりにはいささか驚ろかされた．　しかし一方　この国の人達の変らぬ柔和な態度は以前から全く変っていないように思える．　町を行く人の群の中に　オレンジ色の衣をまとった多くの僧がいる．　男は生涯に一度は仏門に入り修行を積むということだが　老若男女をとわず　人と応待する時に必らず先ず合掌する習慣に接すると　この国の人はすべて仏門に入って　修行しようがしまいが平和を願う仏の心を身につけているように思えてくる．　緑豊かな国土　タイ王国となって以来外国の強い支配を受けていない国

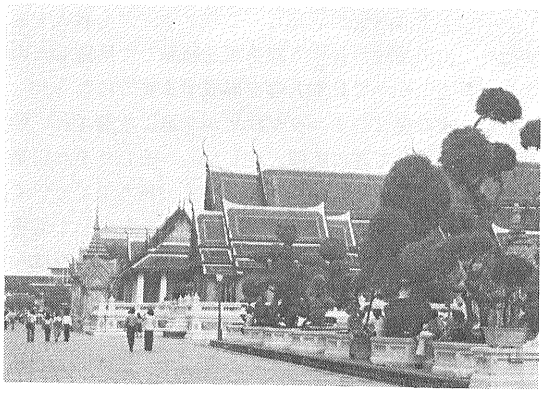

写真1　ワット・プラ・ケオ（エメラルド寺）
バンコックにある代表的な寺の一つで　エメラルドに似た碧玉で作った仏像が安置されていることからエメラルド寺として知られている．

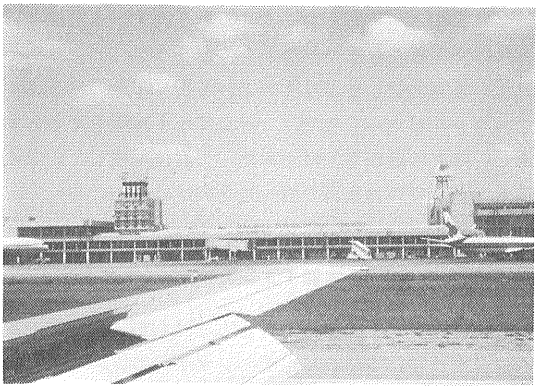

写真2　バンコックのドンムアン空港
タイの玄関に当る空港で　左側が国際線　右側が国内線の建物．

そして他人に干渉せず　他人から干渉されず　自己の意のおもむくままに生活を楽しもうとする気性が　人々の柔和さの根源として生きているのではなかろうか.　例へば　日本にみられる生産性のあくなき追求とそれに係わる人々の息つくひまもないようなせっかちさは　この国では殆んど感じられない.　だが　余りにも変り身の早い世の中の激しい流れの中で　いつまでもその柔和さを保ちつづけて欲しいとは願うもののいつまでそれがつづくのか　ふと疑問に思うこともある.

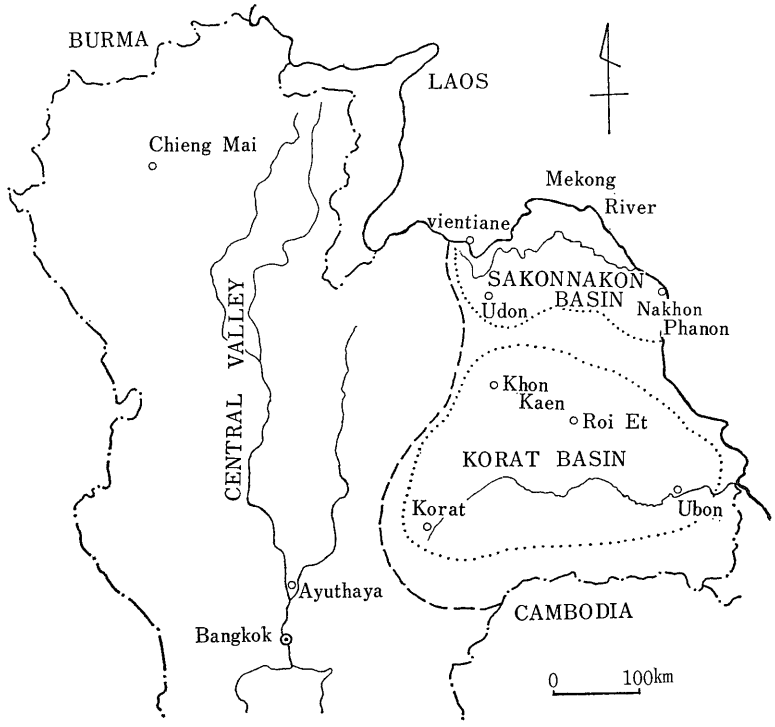

図1

王宮の近くにある巨大な野外市場に入ってみた.　肉　魚　野菜　果実などを商う店は　一体何軒ぐらいあるのだろうか.　かつてアフリカを旅行した折　何の肉か知らされないまま猿の肉を食わされたことがあった.　燻製にした肉を煮たものだったが　その猿の肉は鰹節と歯ざわりも味もよく似ていた.　このような猿の肉をもう一度出されたら他に適当な食物がなければ躊躇せずに食べるだろうがこのマーケットの店先にうず高く積まれているゴキブリに似た昆虫だけは　目をつむっていても口に入れる勇気はない.　強烈な香りというよりはむしろ臭に誘われて一軒の店に入った.　その店には　ドリアン　パパイア　バナナ　マンゴスチーンなどが並んでいる.ホテルなどへの持込みが禁じられているほどの強烈な臭を放つドリアンだが　クリーム状の白くそして甘い実は最高に美味い.　何とかしてこの臭を消すかまたは良い香りに変えることはできないものだろうか.

甘い果実にむしゃぶりついている折　叩きつけるようなスコールがやってきた.　そして小1時間もするとまぶしいほどの陽がさしはじめた.　右往左往していた人達も　どうやらお目当の店へ足を向けはじめたらしい.

古都チエンマイ

混み合っている国際線の待合室とはちがって　国内線の待合室は空いている.　チエンマイ行の旅客は多くないらしい.

水田をなめるように飛発った飛行機は　大きく旋回して　機首を北へ向けた.　ぽつんぽつんと空席がある機内で　昼食が配られた.　カレーライス風の決して豪華な食事ではないが味は良く　国内線でのこうしたサービスは有難い.　14世紀の半ばに建設された首都アユタヤは　右側に見えるはずだが　不幸にも左側の座席をあてがわれたため　全く見ることができない.

アユタヤは　山田長政で知られる日本人になじみ深い古都である.　ここに首都が建設されておよそ250年後ごろから日本人が住みはじめ　一時は2,000人の日本人が住んでいた都である.　御朱印船が往来した当時のタイ（シヤム）では内乱が続発し　このアユタヤも戦火を浴びた.　山田長政が日本人義勇軍を組織して活躍したのはこの頃で　やがて日本人町を形成するまでになった.しかし　その後このアユタヤはビルマ軍に攻撃され　殆んどが破壊されて遂に廃墟と化した.　そしてそれ以来アユタヤは昔の栄光を取戻すことなく　朽ち果てていく空しい姿をとどめているにすぎない.　それにしても当時この地に定住していた日本人は　そしてその末裔は一体どのような運命を辿ったのだろうか.

広々としていた水田が北上するにつれて次第に小さな区画の水田に変ってゆく.　蛇行する川はピン川だろう.その岸辺に建ち並ぶ家と豊かな水と水田を見つめていると　水と人間の深い係わり合いや土に生きる農民の平和

な生活風景が想われる．　バンコックを発っておよそ1時間40分　チエンマイ空港に到着した．　西にそそりたつドイステップ山の頂上にはワット・ステップ（ステップ寺）が建っているはずだが　そこは厚い雲におおわれている．

チエンマイは　チエンマイ王国の首都として栄えた古都である．　ピン川が貫流する広大なチエンマイ盆地のほぼ中央部に位置するこの町には　今もなお昔日の面影が至る所に残っている．　花崗岩からなるドイステップ山塊の頂上に建つ由緒ある寺　眼下に拡がる盆地と古都その光景は延暦寺が建つ比叡山と京都にみられる光景を想い出させる．　稲が黄金色に実る時　ドイステップの頂上から見るチエンマイ盆地はさぞかし美しいことだろう．　チエンマイは「新しい町」を意味するそうだが13世紀末頃にこの町を建設したメングライ王は　この豊かな自然の恵みに生きる民衆と共に　新しい町造りに励んだのであろう．

市街地に入る頃　清らかな水を湛えた堀に取囲まれた石垣が見える．　この堀に囲まれた平らな広々とした敷地には　市場や民家などが建ってはいるが　かつては堅固な建物があったのだろう．　静かなそのたたずまいからは　かつてはこの場所が城塞であったこととチエンマイが城塞都市であったことが推察される．　近代的な高層ビルディングが数えるほどしかないチエンマイの市街には　かなり古めかしい家が多い．　タイ第二の都市とはいいながら　それほど大きくもないこの市街に90以上のお寺があるという．　いかに仏教の国とはいえ　この寺の多さにはいささか驚ろかされる．　古い時代の日本では　寺は民衆に心の安らぎを与える場として貢献したことは確かであろうが　一方　絶対的権力をもつ存在であったことも否めない．　この古い都に一きわ目立つ多くの寺が人々の心の中にどのように生きているのか判らないが　この多くの寺の中には無人の寺も幾つかあることを知ると　時の流れとともに変らざるをえない世相と人の心が想われる．

写真3　ドンムアン空港付近の水田
整然と区画された水田と　これを横切る川に沿って点在する農家が　人間の生活と水との深い係わり合いを象徴している．

自動車やペチヤが流れ　商店が軒を連ねる賑やかな通りを色あざやかな衣装をまとった女性がゆったりと歩いている．　チエンマイは「チエンマイ美人」で知られているように　タイでは美人の最も多いところだそうだがほんの一時この町に足をとどめた旅行者には　この町の女性と他の町の女性とを比較してみることもならず　この町が一般に言われているような美人の産地か否かは判らない．　もし本当に美人が多いということであればそれは清純で豊かな心が人を美くしくするとかたく信じているこの旅行者には　美しい自然に恵まれて平和に生きつづけてきたこの町の人の温和な心の象徴のように思える．　どことなく落着いて優雅な感じのする御婦人方

写真4　チエンマイ空港
建物は小さいが　古都にふさわしく　しようしゃで清潔な上にきわめて静かである．

写真5　チエンマイ南方の水田
ドンムアン空港付近と同様に川沿いに農家が点在しているが　それぞれの水田の形は不規則でやや小さい．

は　やはり長い歴史を積み重ねてきた古都に特徴的なそしてふさわしい存在のようである．　古い城塞は今もその名残りを美しく残している．　チエンマイの新しい市街はこの城塞の外側に広がり　道行く女性の中にはブラウスにスカート　そしてハイヒールの靴で闊歩する人もいる．　出来ることなら　この城塞と同様に美しいプロポーションをより美しく見せる古来からの衣装を保ちつづけて欲しいとは思うが　これは気候風土や生活習慣に根ざす先人の智恵が生んだ多くのものを既に失なっている社会にあくせくと生きる旅人の　失なわれたものへのノスタルジアにもとづく　はかない願いかもしれない．

平坦な町のほぼ中央部に建つ近代的なCホテルの609号室に入って　ふと因縁めいたものを感じた．　この部屋には　かつて妙な縁で知り合った某国立大学出身のS君が泊ったことがある．　S君はこの地を訪れる前に拙宅を訪れ　はじめての海外旅行を目前にひかえて　海外旅行についての心構えやら気をつけるべきことなどを注意深く質問した．　「しっかりした目的意識をもたない物見遊山の旅行ならば止めた方がよい」という問に　彼は「高地民族についての研究の一助として旅行する」むね語った．　若いS君にとっては生れてはじめての海外旅行　それも華やかな大都会ではなく　時期によっては好ましくないことが発生しかねない北部山岳地帯への旅行はさぞかし心細かったのだろう．　空港へ見送りに行った出発の折　一人旅に出ようとするS君の表情には緊張のいろがありありと浮んでいた．　メオ族・カリアン族・イーケオ族・アカ族・ムサ族・ロア族・イーコウ族など　言語や生活習慣の異なる多様な高地民族のどちらかといえば排他的な生活圏の中に無事に入ることが出来るのか　また無事に入ることが出来たとしても彼等と共に生活することが出来るだろうかと　恐らくS君の胸中には不安が渦巻いていたことだろう．　学業のかたわらきびしいアルバイトを続けて貯えた金は　この奥地では6カ月以上を楽に過せるほどになっていた．　そしてS君は準備費・交通費・滞在費等のすべてをアルバイトによる自己資金で十分にまかなえると判断した時　この研究旅行の実現に着手したらしい．

期待と不安を胸中に秘めて飛発ったS君の6カ月間を予定した研究旅行は　バンコックの大学の先生方の万端にわたる善意と御協力によって　およそ4カ月で終った．長期間にわたる自費旅行ということもあって　多分S君は日常生活の上でも相当の覚悟をして出発したにちがいない．　そして予期した以上の成果を短期間のうちに得て元気に帰国した時　恐らく　この国の人々の善意をし

写真7　城塞跡への入口にあるマーケット
いかにもタイの古都のマーケットらしい特徴的な建物である．

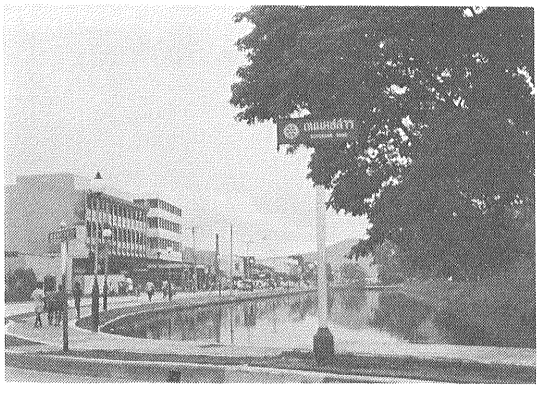

写真6　チエンマイ風景
かつての城塞（右側）は殆んど残っていないが　それを取囲む堀は　今も　清らかな水を満々と湛えている　左側に見えるような近代的なビルディングはきわめて少ない．

写真8　チエンマイの商店街の一部
様々な乗物がみられるが　この写真にみられるような小型の自動車とペチャ（自転車に似た三輪車）がもっぱら庶民の足になっているらしい．

みじみとかみしめたことだろう．　この旅行で得たものは　それから数年の後　およそ400ページにおよぶ論文に生かされ　S君はこの論文によって博士号を授与された．　「研究のための旅行ならば　いかなる人にも　いかなる時にも　学ばせて戴くという気持を常にもっていて欲しいと出発前に言われたことを　忠実に守りました」と語るS君の言葉に　ふと安らぎをおぼえた．　人にはそれぞれの考え方や生き方がある．　実りのない遊びに時と金を費やす若者も居れば　自分の将来を見つめながら精一杯の努力を積み重ねているS君のような若者もいる．　世相の移り変りも様々なら　その流れの中に生きる人々の姿も様々である．

ホテル前の広場で子供達が縄とびに興じている．　客待ちをしているペチヤの男達がその子供達の遊ぶ姿を見守っている．　今は健康を保つ一つの方法として縄とびを日常生活の一つに取り入れている人が多いらしいが　縄とびは一体いつ頃からはじまったのだろうか．

遠い昔　稲作にいそしむ農民達は稲の成長に欠かせない水の豊かさに希望をふくらます一方　日照りが続いて水がかれはじめると雨乞いをすることが多かった．　竜神が雨を降らすと固く信じていた当時の農民は前の年に収穫した稲の藁で竜の姿を作り　これを神に捧げて雨乞いの儀式を執り行った．　見晴しの良い山や丘の頂きで行われた神への祈りは　やがてその祈りの場所に建てられた神社で行われるようになりはしたが　藁で作った竜を捧げる習慣は続いた．　今も神社にみられる注連縄（しめなわ）は当時の藁で作った竜の名残りである．

夜明けから日没までを田畑で過す当時の農民達は　恐らく全員が集って仕事を忘れ　何かに打興ずることもなかったろう．　しかし　物を作りそしてそれを利用するという人間だけがもつ智恵は　藁を利用して竜を作るという経験を生かして太い綱を作り　そしてそれを引張り合う綱引きという遊びを生み出した．　今は単に勝ち負けを競う一つの方法として受け継がれているにすぎないが　綱引きという一つの競技あるいは行事には　丈夫な綱を作る材料となる成長した稲を得た農民の喜こびとその稲を育てるに欠かせない雨をもたらす竜を手中にしてより豊かな実りを求めようとする願望と　そしてこれを集団生活の一つの糧とした先人のすばらしい智恵がひそんでいる．　恐らく縄とびというきわめて単純な遊びもこうしたいきさつと深く係わって生れたのではなかろうか．

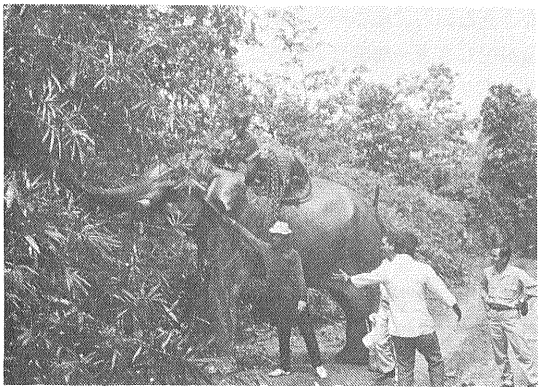

写真9　鉱山への道で会った象
雨に濡れた身体　太い鎖　そして切断された巨大な門歯（いわゆる象牙）を見ていると　野生のたくましさと　労働に明け暮れて生涯を終えるものの切なさが伝わってくる．

鉱山への道

パンケーキ・オムレツ・パイナップル・コーヒー3杯の朝食を終えて間もなく　西へ向ってチエンマイを後にした．　市街はまだ本格的には活動していないらしい．家並がとぎれて間もなく　美しいゴルフ場が目に入った．プレヤーの姿がまったく見当らないのは早いせいか　ゴルフを楽しむ人がきわめて少ないせいか　よくは分らない．　緑一色の風景の中を走る舗装道路は　チエンマイから20km付近で砂利道に変った．　奥地へ向かうにつれて次第に路面が荒れてゆくらしいこの道路は　本格的な雨季には想像以上に通行困難になるようである．　広々とした平野を突走る道は　山岳地帯へ入って曲りくねった坂道に変った．　余り広くもない川の対岸では使役用の象が訓練を受けている．　野生の象が家族の一員として野良や山で働くようになるまでには　一体どれぐらいの期間が必要なのだろうか．　人間の欲望のままに過保護に育てられる動物は別として　自然の中で働く動物は　主の意のままに行動する従順さと野性のたくましさを兼ね備えていなければならないように思えるが　主となるべき人の純できびしい心構えと忍耐の心とによって人間社会で生きる術を会得してゆくのであろう．　雨上りの道で荷車を曳いてくる象に出会った．　荒々しい肌に光る水玉　柔和な眼差で無心に木の葉を食べるほんの一時のその象の姿を見ているうちに心の安らぎを感じた．とくに変ってもいないこの出会に何故そのように感じたかはよく分らないが　もしかすると　日常　冷暖房のよくきいた室内で飼われ　栄養満点の食事を与えられ　美容院でお化粧をして高価な衣類を着せられる生活をしているいわゆるペットと　動物としての生き方を最大限に抑制することによって自己満足をしているその飼主に対する一種の嫌悪感とがそうした感情を覚えさせたのかもしれない．　しかしよく考えてみれば自己満足のために猫可愛がりに何かを可愛がるということは　唯単に人間

の動物に対する感情の表われではなく　人間相互においてもよくみられる現象である．　大した努力もせずに奢侈だけを求める人間とそうした人間に必要以上に手を貸す人間には　地道に生きる人は恐らく強い嫌悪感をもつだろう．　以前　小犬を飼っている人から「人の子はいたずらするが　犬はよく言うことを聞いていたずらはしないし　嬉しい時には尻尾を振ってじゃれるから人の子よりは可愛い」と聞かされたことがある．　その時いたずらもできないような飼い方をされているその犬を不憫に思った．　人間と動物とを問わず　野生的なたくましさを既に失っているものには魅力はない．

ほんの一握りの家があるアンフオ・サモアニの道路傍に小さな食堂があった．　駄菓子を少しばかり並べたその店には　おカミさんが1人　所在なさげに椅子にもたれていた．　人も車もめったに通らぬこの街道の小さな食堂では　客もあまり立寄らないだろうし食事を注文しても相当に時間がかかるだろうと予想した．　しかし注文したウドン風の食事は5分とたたないうちに出来上った．　たっぷりと入った肉と野菜と麺は中々美味い．
その味の良さと素早く出来上ったことから察すると　この食堂は意外にはやっているのかもしれない．

大して高くはないが山腹の急な山が目立ちはじめた．多分ビルマとの国境をなす山岳地帯の東縁部に入ったのだろう．　所々に見える道路の切取部には　砂岩や頁岩が原岩になっているらしい変成岩が露出している．　チエンマイを出発してから4時間ばかり過ぎた頃から山容はおだやかになり　花崗岩の露出がみられるようになった．　この付近は西方へ向って半円状に点在する三畳紀～ジュラ紀の花崗岩分布地域のほぼ中心部に当る．　タイ北部に分布するすずやタングステンや蛍石などの鉱床はこの花崗岩に伴われて形成されたとみなされている．蛍石鉱床にベリルが伴われるばあい　既知鉱床では　紫色の蛍石とベリルとが密接に関係していることがほとんど例外なく認められているが　この地域の蛍石鉱床にベリルが伴われている例はないのだろうか．　タイのすず・タングステン鉱床は　主としてこの北部とバンコック西方の国境付近と南部の半島に分布している．　これらの生成時期については　北部の鉱床は三畳紀―ジュラ紀　バンコック西方地域の鉱床は三畳紀―ジュラ紀と白亜紀―第三紀　南部の鉱床はほとんど白亜紀―第三紀と考えられている．　一方それぞれの地域で花崗岩に伴われている他の鉱床についてみると　北部には蛍石鉱床やアンチモン鉱床が多数分布しているが　バンコック西方の地域には蛍石鉱床はかなり多数分布しているもののアンチモン鉱床はきわめて少なく　南部の半島には蛍石鉱床もアンチモン鉱床もほとんどみられないが　すずやタングステンの鉱脈を起源とする砂鉱床中には　ニオブやタンタルなどの有用鉱物が大量に含有されている．　このような顕著な地域性は　鉱石成分の挙動と密接に関係する花崗岩の貫入に際しての物理的・化学的条件や性質によって生ずるのだろうが　また鉱床生成後の浸蝕・削剝の程度とも密接に係って生ずるのであろう．

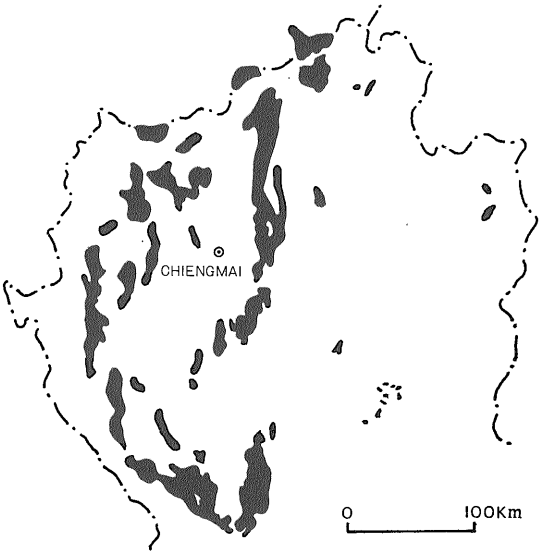

図2　タイ北部の三畳紀―ジュラ紀花崗岩類(黒色部)の分布
(S. Sodsee et al. 1963による)

チエンマイからおよそ83 km　途中で簡単な食事をしたり小休止したりはしたものの　目的地に到着した時には既に4時間20分が過ぎていた．

すず・タングス鉱床の概観

深い緑に包まれたこの田舎には　風にそよぐ葉ずれの音さえない．　ゆるやかな山の斜面にみえるささやかな畠が佗しさを一層感じさせるような風景ではあるが　坂道を下りきった所には　すずやタングステンを採掘する国営鉱山がある．

この鉱山はタイ歴2501年 (1957年) に開発されたタイ北部では数少ないすず・タングステン稼行鉱山の一つである．　従業員は約400名で　月産20～25 t の精鉱を生産している．　採掘切羽は10カ所ぐらいあるらしいが　採掘中の切羽はNEE-SWW 方向に点在する3カ所であった．　著しく風化してもろくなった黒うんも花崗岩中に経数m前後の砂岩のゼノリスが含有され　花崗岩の上には　ルーフペンダント状に同様の砂岩がのっている．
すず石や灰重石は　主としてこのような砂岩中に鉱染状に含有されているらしいが　以前に採掘された部分には

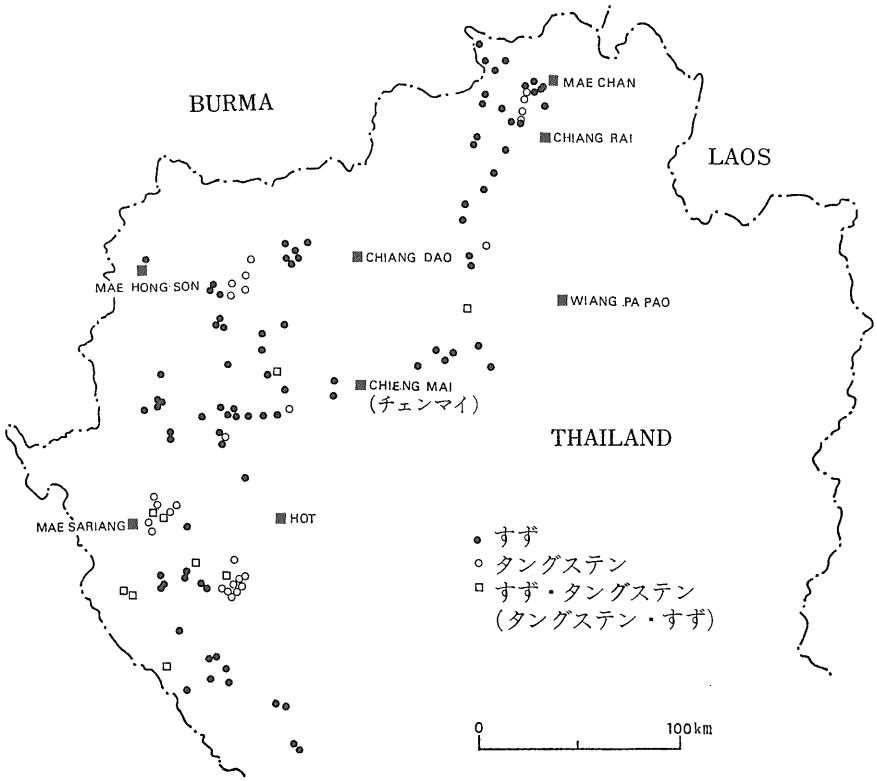

図3
タイ北部のすず・タングステン鉱床分布図
(T. O. Veit et al. 1973による)

これらを含有する石英脈もあったということである．また花崗岩や砂岩をおおう砂礫層中にも　いわゆる漂砂鉱床としてすず石や灰重石が含有されている．　「すず石や灰重石の量比は切羽によって異なるかどうか」という質問に「一番奥の切羽では灰重石が多く　中央部の切羽では両者はほぼ等量　一番手前の切羽ではすず石が多い」という答が返ってきた．　きわめて興味深い鉱石鉱物の分布であり　じっくりと見たい欲望にかられはするが残念ながらその欲望を満足させる時間的ゆとりは全くない．　およそ400名の従業員が働いているにしては目につく人の数は少ない．　高圧をかけた水が風化した岩石を砕き　砕かれた石は瞬時にして砂状に変り　そして木製の樋を流れていくうちに　比重の差によって　すず石や灰重石は濃集していく．　古い時代に先駆者の智恵が生みだした選鉱法の一つである「猫流し」は　この鉱山でも生きている．　ささやかな流れの水で数名の女性がパンニングに余念がない．　鉱山の従業員なのか否かは分らないが足首までおおう衣類を身につけての単調な作業は　いかに暖かい土地とはいえ水に濡れた衣類が足にまつわりつくだけに決して楽ではなかろう．　それにしても何故このような作業をするのに足首までもおおうほど長い衣類を着なければならないのだろう．　着なれているせいかそうした衣類だけを身につけるのが古くからの習慣なのか　あるいはスカートやズボンになじまないのかそれは判らない．

鉱山裏側の山への道は水滴の光る草におおわれていた．路面の荒れたこの赤土の道は　峠を越えて別の鉱山へ向っているということだが　重い機材や鉱石を積んだトラ

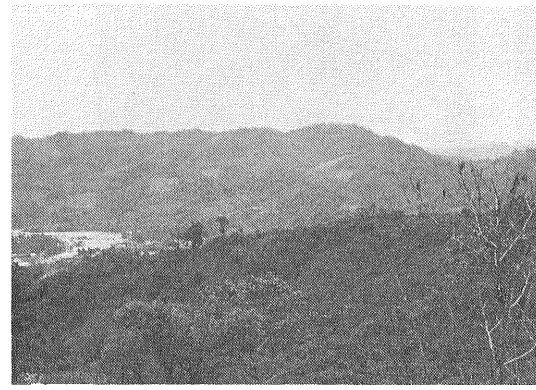

写真10　国営鉱山（左端）付近の風景
古生代の変成岩類とこれに貫入する花崗岩質岩　およびこれらをおおう砂礫層が分布するこの付近は北部タイのすず・タングステン鉱床分布地域に含まれる．　山の頂上は標高1,500～1,700mである．

ックが往来する道にしては余りにもせまくそして生々しい．　国営鉱山からの比高およそ350 m　標高およそ1,550 m の峠から見下ろす東方には国営鉱山の廃砂が白く光り　西方にはビルマとの国境をなす山岳地帯へ続く高い峯が連っている．　自然林にくまなくおおわれているこの山岳地帯に鉱山があるなどとはとても思えないような静かな世界が展開されている．　しかし　この雄大で静寂な自然だけが強烈に迫ってくるこの景観の中に営々と生きる人もあり　稀には予期せぬ悲しい出来事が発生することもあろう．　共存共栄という美しい言葉にそむかずに生きるのは人間本来の姿であろうが　目まぐるしいまでに変転する現代の世相の中でそれを忠実に守りつづけるには相当の覚悟がいる．

峠を下りきった所で車道はとぎれ歩きはじめた．　枯草が厚くつもった山道は　耳をつくような静かさの中に細々と続いている．　突然かん高い笑い声が聞えてきた．そして間もなく色鮮やかな衣服の若い女性達が姿を現わした．　どうやら買物に行った帰りらしく小さな荷物をそれぞれ持っている．　恐らく高地（山岳）民族のある部族だろうからタイ語が通じるかどうか分らないが「サワデイ（今日は）」と声をかけると立止って合掌し　お辞儀をしながら「サワデイ」と挨拶して静かに立去って行

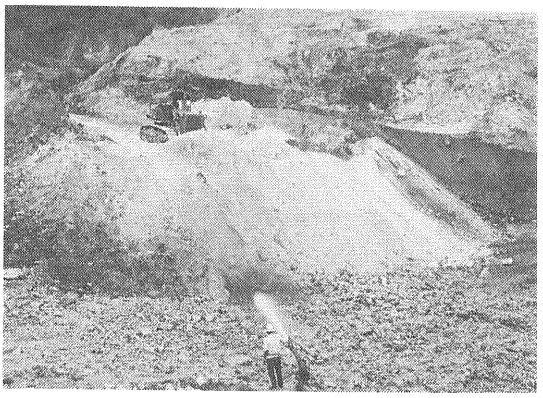

写真11　国営鉱山の現場の一部
著るしく風化した変成岩（灰色部）と花崗岩（下部の白色部）およびこれらの上にのる砂礫層をショベルカーで削りとり　これに高圧水を吹きつけて砕くと共に一種の比重選鉱を行ない　猫流しにかけている．

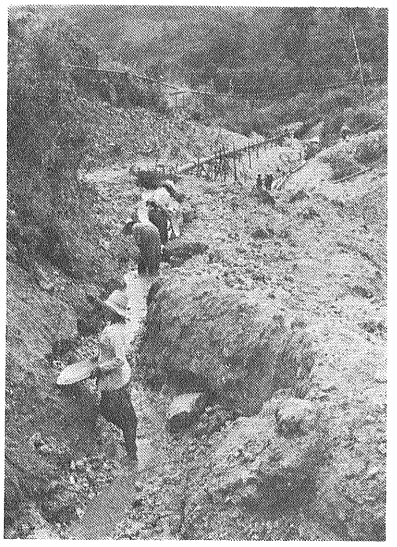

写真12　国営鉱山の現場の一部
砂礫層中に含有されているいわゆる砂すずをパンニングする女性達．

写真13　メオ族の男
こがらだががっしりとした身体つきと黒っぽい衣服は高地（山岳）民族に共通しているらしい．天秤棒にバケツをさげての水汲みは日本の田舎でみられるのと全く同じである．

写真14　山道で会った女性達
買物に行った帰りらしく　荷物を袋に入れ　その紐を頭にかけて運んでいる．　このような荷物の運び方は　タイ独特のものではなく　アフリカや南米などでもよくみられる．

った．　バンコックやチェンマイのような大都会でもこのような辟地でも　この国の人の挨拶の仕方は変らないようだが　大都会の女性のどちらかといえば花車な姿にくらべると　この女性達の体軀はたくましく感じられる．この相違は恐らく長い間にわたって山野を歩いたり肉体労働を続けた人達とそうでない人達との生活態様の相違にもとづいて蓄積されたものであろう．　がっしりとした身体とやや短かめの太い足を極端に嫌う人も世の中には少なくないが　よく考えてみれば恐らく終日働いているであろうこのような人達によって　多くの人々の日常生活の基盤が支えられていることは否めない．　世の中には高度に発達した科学技術の恩恵で時間的ゆとりが生れ　美味しい食事に目を奪われて栄養過剰となり　多額の金を支払って痩せる努力をしている人が多勢いるらしいが　たった今爽やかな笑顔を残して立去った女性達には　こうした人達の姿と生活のあり方はとても想像できないだろう．

山道を通り抜けて一つの小さな採掘場に着いた．　採掘場の壁には黒うんも花崗岩とスポンジ状のすず石が散点する部分がむき出しになっている．　すず石を含む部分は結晶片岩とみなされているようだが　多量のうんもが濃集し　著しく軟弱になっているその部分が結晶片岩であると理解するには至らなかった．　やや丸味をおびたスポンジ状のすず石の大きなものは5cmほどもある．高圧水を吹きつけた所からころころと転がり落ちるすず石を見ていると「花崗岩の貫入に伴われた鉱染状鉱床である」という声が遠くの方から聞えてくるように思えてくる．　それにしてもこの採掘場へ到着するや否や一緒に来た数人の若者が　自動小銃を構えてここを立去るまで見張っていたのは何故だろう．　静かな平和そのものと見えるこの山深い所で　まさか他人に襲撃されるとは思えないが　はじめてこの地を訪ずれた異邦人には想像できない何かが潜在しているのだろうか．

最後に見た現場は着手されてまだ間もないらしい．そこには花崗岩とこの上にのる砂礫層が露出し　漂砂鉱床を対象に採掘を兼ねた探鉱が進められていることを示している．　錫石はこの砂礫層の基底部から1mばかり上までの間に含有されているが　この地域全体では　漂砂鉱床はどのように分布しているのだろうか．　初成鉱床の探査や発見が重要であることは当然ではあるが　何気ない話の中には漂砂鉱床の探査余地が多分にあることを痛感させるものがあった．　隙間のないほど植生におおわれて露出が著しく少ないこのような地域での漂砂鉱床の探査は　多くの困難を余儀なくされることは目に見えているとも言えそうだが　いずれは着手されるのであろう．　変成岩や花崗岩などが形成する山の麓付近ではこれらをおおって分布する新期堆積物からなるらしいゆるやかな地形が発達しているが　これらの堆積物の基底面の形状や構成物質や厚さなどは　一体どのようになっているのだろうか．　表土をすっかり剝ぎ取り　基盤とその上にのる堆積物の大きな断面が幾つもむき出しにされた時の状況を想像しながら　木立におおわれたか細い道を戻った．

チエンマイへ

現地を去る日の朝　立派な髭を生やしたかつての陸軍大尉殿も食事の世話をしてくれた2人の美しい姉妹も何となくそわそわしていた．　ほんの一時の付合いとはい

写真15　採鉱現場の一部
上部は表土　下部の白っぽい部分は花崗岩　両者の間にすず石が含有されているが　この部分が変成岩なのか新期の堆積物なのか判断するのは中とむずかしい．

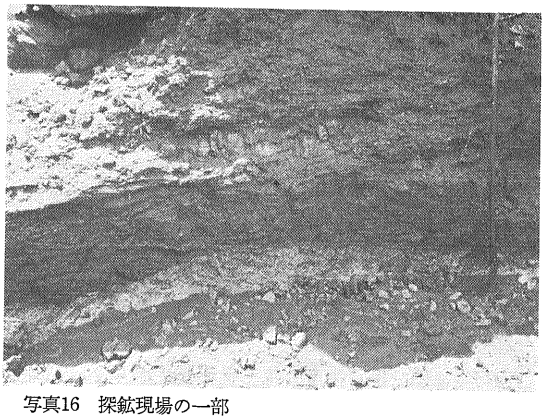

写真16　探鉱現場の一部
下部の白い部分は花崗岩　これの上部は砂すずを含有する砂礫層．

え　やはり別れは淋しいものだ．　「別れは会う嬉しさの始まり」とも思えるが　それは特別の関係にある人達に通用することで　もう再びこの人達に会う機会はないこの朝の別れには淋しさだけがつのってくる．　所々に水溜りがある道をチエンマイへ向って走る．　往路とは違った道を走っているのは　同乗してくれた人の親切な心づかいであろう．　山岳地帯が視界から消え　緑におおわれた丘のゆるやかなうねりの間に拡がる水田と一かたまりの農家のたたずまいは　ほのぼのとした美くしさを見せている．　大きなカーブを曲ったとたんに騒々しいほどの鐘や太鼓を打ならす音と人声が聞えてきた．お祭りを想像させたその音は葬儀の場から流れていた．声を押殺して泣くしめやかな葬儀とは全く異ってその葬儀のにぎやかさは異様にうつった．　かつてある国を訪ずれた折　鳥葬が行われた場所を見たことがある．　人家から遠く離れた鋭い岩山を背にしたその場所には　コンクリートで造った円筒形の大きな台座があった．　近くで見ることを許されないため　少々離れた場所から見たにすぎないが　恐らく死者はこの台座に横たえられ群がる鳥についばまれてその肉を失っていくのであろう．ある国のある地方の鳥葬では　鳥が食べやすいように死者の頭骸骨を大きな石で砕くということだが　国によって　民族によって　場所によって葬儀のあり方は様々である．　人間もいわゆる動物も　その一生の中で絶対に自分で確認することが不可能な大きな出来事が二つある．それは誕生の瞬間と死ぬ瞬間である．　新しい生命が世に生れた時の人々の喜こび様には大きな違いはなさそうだが　生涯を閉じた人に永遠の別れを告げるしきたりは深い悲しみを別にして様々である．　溢れ出る涙をこらえて死者の後を黙々と歩くのも　鐘や太鼓で野辺の送りをするのも　そして山の頂で1片の肉も残らないように鳥が喰うのを祈るのも　すべて死者の冥福を祈る人々の心の表われだろうが　このような違いは一体短かな人間の歴史の中でいつ頃から生じたのだろうか．　家族や近親者らしい人々に囲まれた棺に黙礼をして通り過ぎた．

午後3時のチエンマイ市街は相変らず賑やかであった．草深い田舎から都会に出てくると　すべてがもの珍らしく見える．　チエックインの時刻にはまだ時間があるが前に泊ったホテルのフロントでは快く鍵を渡してくれた．だが残念ながら609号室には先客が居た．

1978年に鉱山から生産された世界のすずとタングステンの量は　それぞれ252,000 t と 45,416 t である．　このうちタイの生産量は　それぞれ 31,000 t (約12.3%) と 3,187 t (約7%) を占めている．　タイのすずやタングステンの圧倒的多量が南部の半島で生産されているのに比較すれば　北部の鉱山からの生産量は微々たるものである．　しかし活気に満ちた大鉱山もひっそりとした僻地の小鉱山も国の経済発展に貢献し　人々の生活を支える一助となっていることに変りはない．　奥地で瞥見した国営鉱山はひっそりとしているように感じられ　その生産量の国内生産量に占める割合は10%にも満たない．だがこの鉱山に立ってその生産量を日本の生産量と無意識の中に比較している自分に気がついた時　人影もまばらなこの鉱山が大鉱山のように見えてきた．　そしてこの鉱山のたたずまいと　「埋蔵鉱量についてはよく判らない」という現地の人の言葉が　いつまでも脳裏に浮んでいた．

コラート高原の遠望

出来ることならチエンマイから 120 km ばかり北東方にあるウエンパパオ鉱山を訪ずれてみたいと思っていたが　月々50～70 t の灰重石を産出しているこの鉱山を訪ずれるゆとりはなかった．　チエンマイの静かな早朝せめてもの名残りにホテルの周りを歩いてみた．　ホテルの前には客を待つペチヤは1台もいない．　どの家も扉を固く閉ざし自動車も歩く人も見当らないこの古都の静まり返った朝は　歴史の重みを感じさせる．　所々に残る古い時代の素晴らしい建造物は一体いつまでその姿をとどめているのだろうか．

バンコック行の1番機は　チエンマイへ来る時のプロペラ機と違ってジェット機だった．　快晴の大空の下には　緑の中をオレンジ色の川が蛇行している．　左手に遠くコラート高原がかすんで見える．　空から遠望するこの高原にはきわだって感じさせるものはないが　鉱物資源に関する仕事にたずさわっている者にとっては　一度は訪ずれてみたい所かもしれない．

ラオスとの国境をなすメコン川に沿って点在する標高500 m 前後の台地と　サンカムペン山脈とこれに連なる標高 800～1,300 m の山岳とに囲まれたコラート高原は標高 100～200 m のゆるやかなうねりをもつ盆地状に拡がっており　古くからここを生活の場とする人々に自然の恵みを分ち与えてきた．　その恵みとは人間の生活に欠くことの出来ない塩である．　この高原を貫流する川はメコン川へ注ぐ．　しかし雨季になると巨大な集水面積をもつメコン川は著るしく増水し　この高原を貫流する川の水はその源へ向って逆流してゆく．　雨季が終って乾季に入ると　この高原は白い鉱物（塩）におおわれる．　何故この高原に塩が出来るのだろう．　この塩を利用してきた人々は何故に塩が出来るのかを深く考える必要がなかっただろうが　恐らく塩が多く取れる所と全

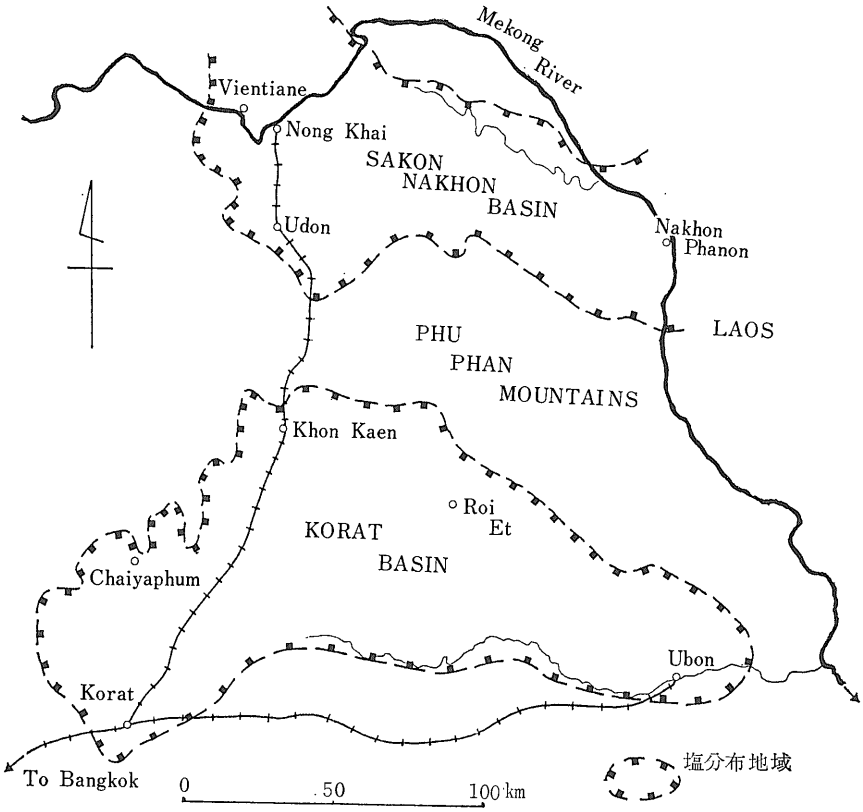

図4 (Louis S. Gandner 他 1967による)

くないかまたは殆んどない所を知っていたにちがいない. 鉱物資源の探査・開発とその有効利用による経済への寄与に関連して この高原にも探査の手がのびた. そしてこの高原には 古生代の変成岩類を基盤とし 三畳紀から白亜紀にわたる堆積層が分布するコラート・ベーズンとフーファン山脈を隔ててその北方に位置するサコンナコン・ベーズンの存在 そしてこれらの堆積層の構成員として岩塩層が潜在していることが判明した. 岩塩層を含有する地層は白亜紀後期の Maha Sarakham Formationである. 既に発見されている6鉱床は88.40～99.45% NaCl の品位で総計29億tの鉱量をもつといわれている (P. Asnachinda, 1978). これらの鉱床については幾つかの成因が考えられているが 地質的環境や産出鉱物などからみて 世界のカリ生産量のほとんどを占めている海成蒸発型の鉱床に類するように思われる. 恐らく遠い昔 地殻変動によって海の一部が塩湖となり長い年月にわたって水分の蒸発が行われて残存する海水の塩分の濃度が高まり 最終的に岩塩層が形成されたのであろう. 膨大な鉱量をもつこれらの鉱床が本格的に採掘されはじめたというニュースはまだ聞かないが 農作物の生育に必要なカリ肥料の単位耕作地当りの消費量がタイでは世界平均のおよそ6分の1にすぎないこと アジアにおいてはカリ資源の開発が殆んど行なわれていないこと 更には世界的な人口増加に見合う農作物の増産に伴なって飛躍的に高まるにちがいない将来像をみるとき コラート高原のカリ資源の開発に寄せられる視線は日を追うごとに熱くなっていくように思われる.

眼下の風景の様々な移り変りにつれて様々なことを想像しているうちに着陸態勢に入ったらしい. ドンムアン空港は相変らず混雑している. 恐らく国際線の飛行機が到着して間もないのだろう. 空港から市内へ向う道路傍には数知れぬ蓮の花が咲いている. 東洋のベニスと呼ばれるバンコック クルンテップ・プラ・マハ・ナコン (天使達の都) と呼ばれるバンコック その繁華街に建つホテルに泊るこの夜はどのように更けていくのかネオンが灯るにはまだ少々時間がある.